たった七組！　数字が示す所は冷酷である。ラッシュアワーにかけての時間なのでと一応は言訳しておかねばなるまい。

＊

かくして春の銀座の夕ぐれに於ては、孤独の散歩者が第一位を占め、男二人連れこれに次ぐ状態である。

更に風俗身分別からの考察を進めた結果は、――

勿論、ラッシュアワーの銀座通行人のメロディーはサラリーマン諸君を以てテーマとして奏でられているものの如くであり、背広服（その大多数はスプリングコートの粋姿）四一一の絶対多数をかち得ている。

だが、――

シックガールの存在は？　尖端の尖端は何処に？　それは銀座通行人の別のメロディー別の時間における調べの中からピックアップしていただかねばならないであろう。

（一九三〇年四月二二日記。「アサヒグラフ」一九三〇年五月一四日号所載。『考現学採集』所収）

1931年銀座街広告細見

わが銀座は、いつも乍ら現代相の選ばれたる一断面として賑かにその考察の媒材とされる。だがその賑かさの中には、多量に広告的要素が織り込まれている事を私は見逃したくない。

で、いつか、私は銀座の広告文化の分析表と言った様なものを作って見たい希望を持っていた。と言うのは、その広告文化の発達過程は、直ちに新東京の全文化への波紋となって伝播して行くであろうからだ。幸、この度本誌の長岡逸郎氏の助力を得て去る三月二十五日銀座街を数往復して、軒別にその広告的要素を採集整列させて見たのが、茲にお目にかける細見図なのである。

＊

もちろん、この図は銀座の全広告的要素を網羅してはいない。それを完全に語らせるには、そこを走るバスのお尻の広告から立撒きのビラ、電柱広告、そのペーヴメントから仰ぎ見られる空中広告に至るまでを登録しなければなるまい。

だから、とにかく不完全ではあろうが一九三一年春の銀座に於ける、その軒別の大小商店デパートの表皮に顕われた広告的要素のあらましを報じ得るなら、この採集図の意義は達せられるものの如くなのである。

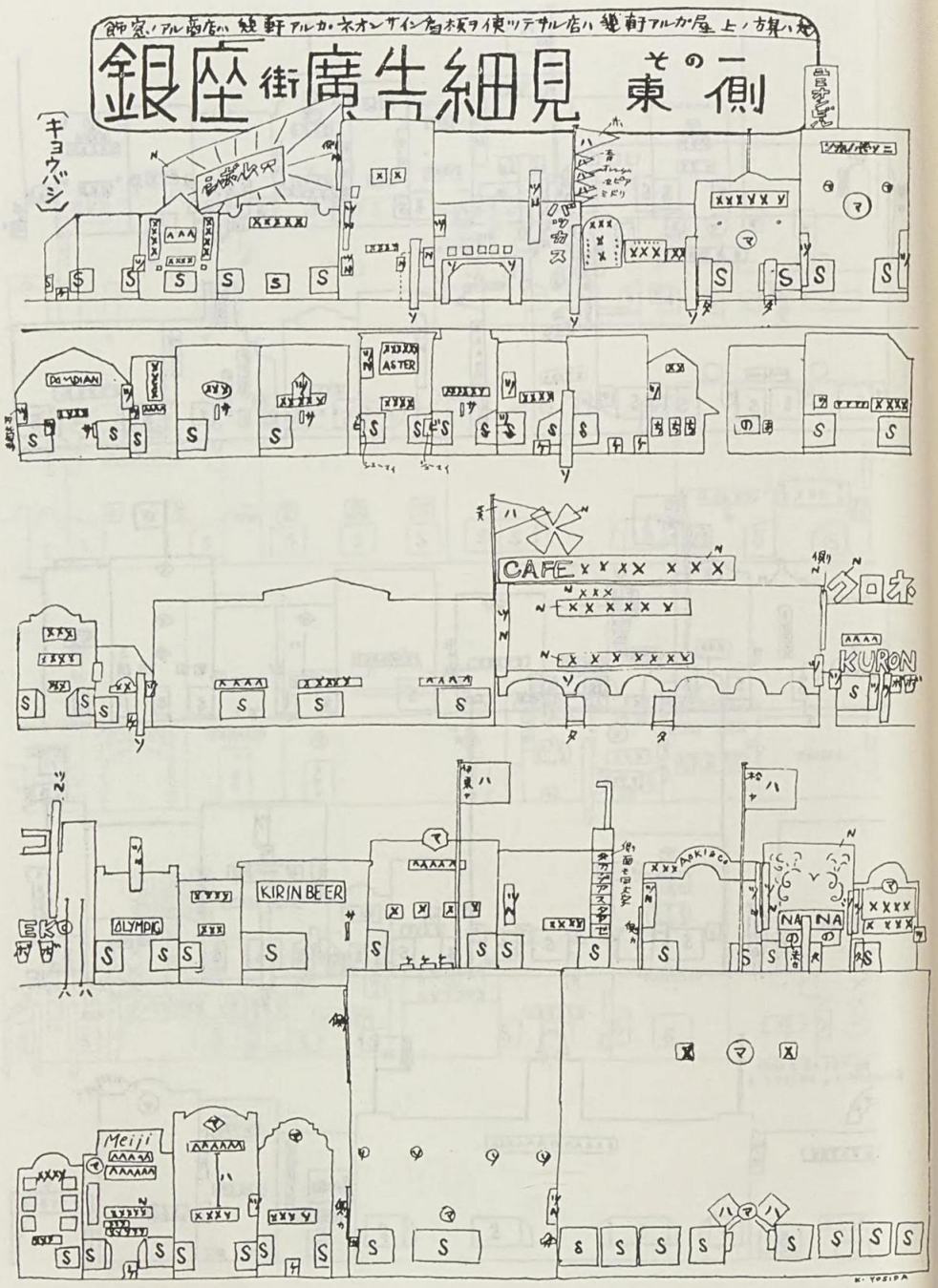
＊

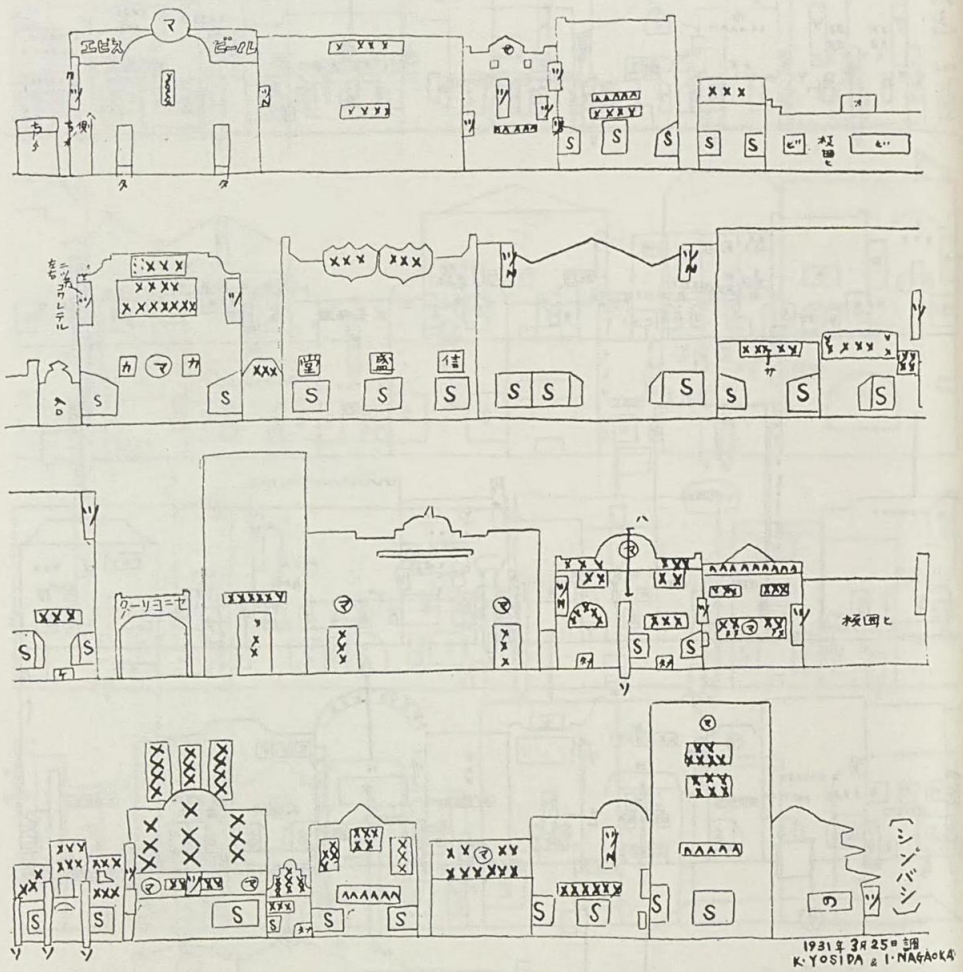
例えばこの図の語るところは、ネオンサインのすばらしい発達を中心としての、看板の分布状態である。それから広告的要素としての本格的なポイントであらねばならぬ処の飾窓——その飾窓を備えた店は全銀座でどの位あるものか。其の他、看板の種類、突出し看板や、吊り下げ看板は幾つ位あるか、どんな高さに於てそれは取附けられているか。屋上に旗を翻している店は何軒あるだろうか、等々の?を幾分なりとも数字的に解きほぐす事が出来るかと思えるのである。

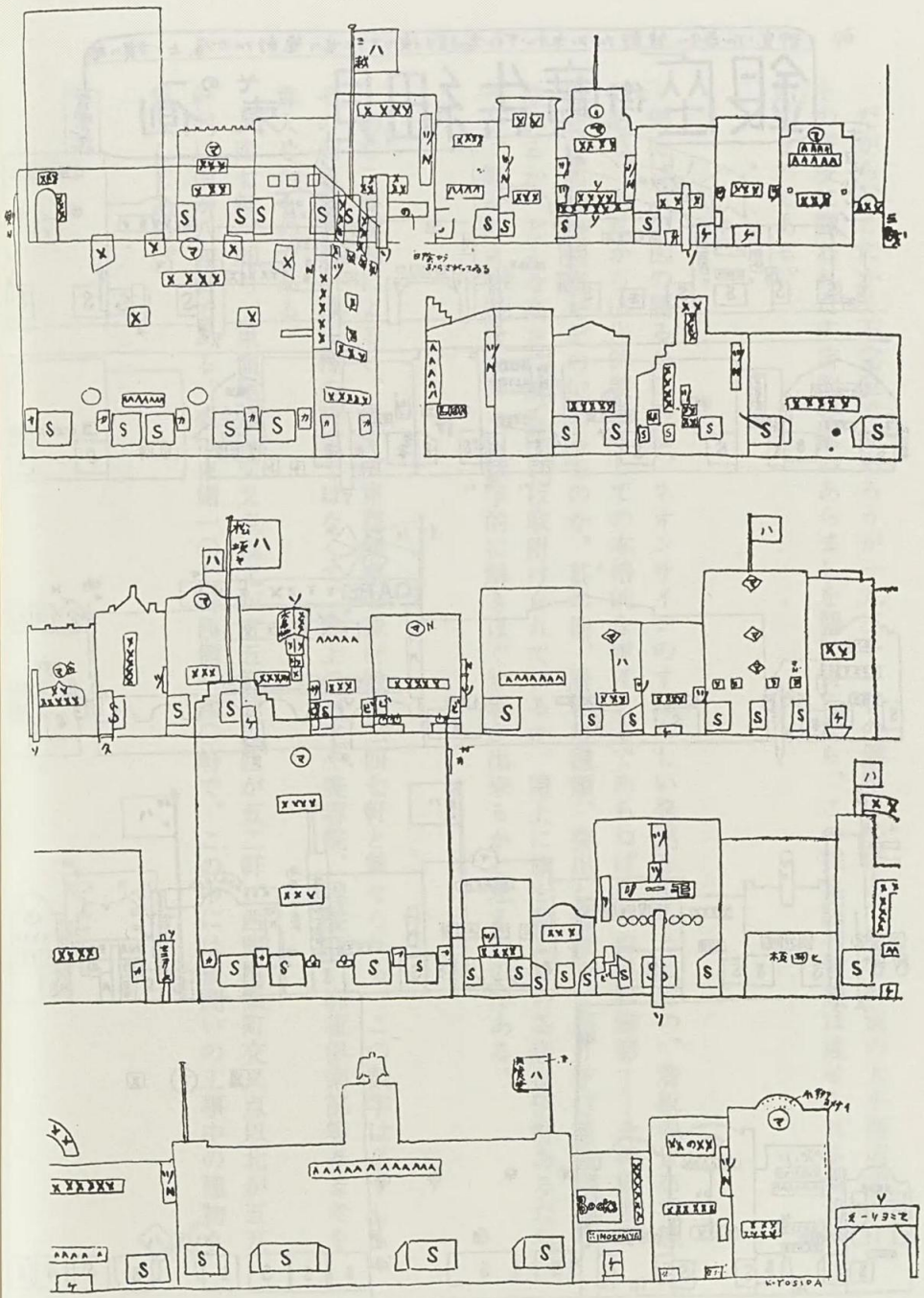
＊

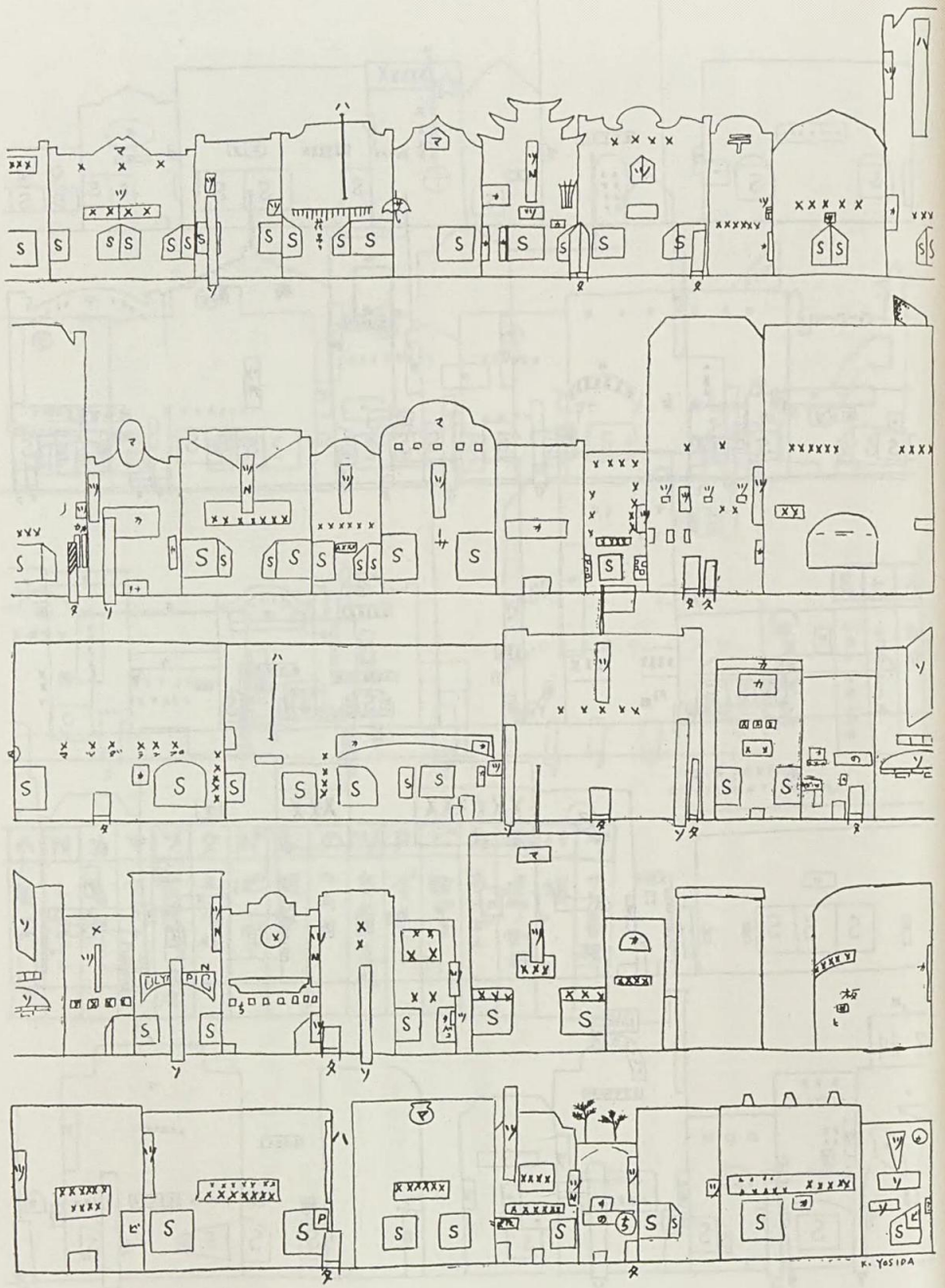
即ちこの調べによると、先ず、東西銀座の総軒数は二四七軒と算せられる。この数字は必ずしも、その商店建物の一棟一棟の算定ではなくて、階上のバアや美容院、理髪店、麻雀倶楽部等々までを算入したものである。

二四七軒、即ち、東側尾張町交叉点以北が五五軒同以西が五二軒、西側尾張町交叉点以北が五五軒同以南が八四軒である。或は東側一〇七軒西側一四〇軒で、この中には板囲いの工事中の建物も算入してある。



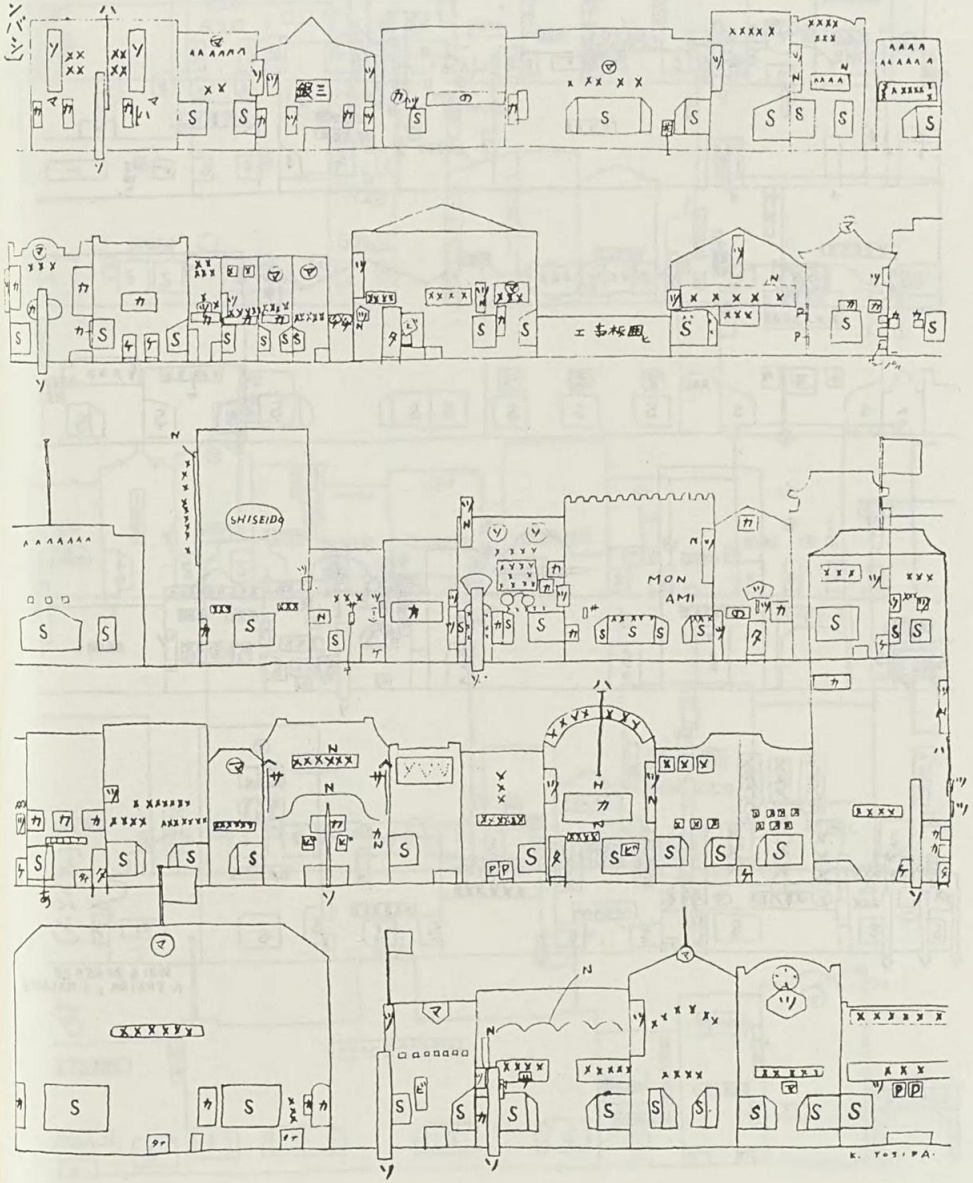

板間ヒ
〔シンバシ〕
1931年3月25日 作画
K·YOSIDA & I·NAGAOKA

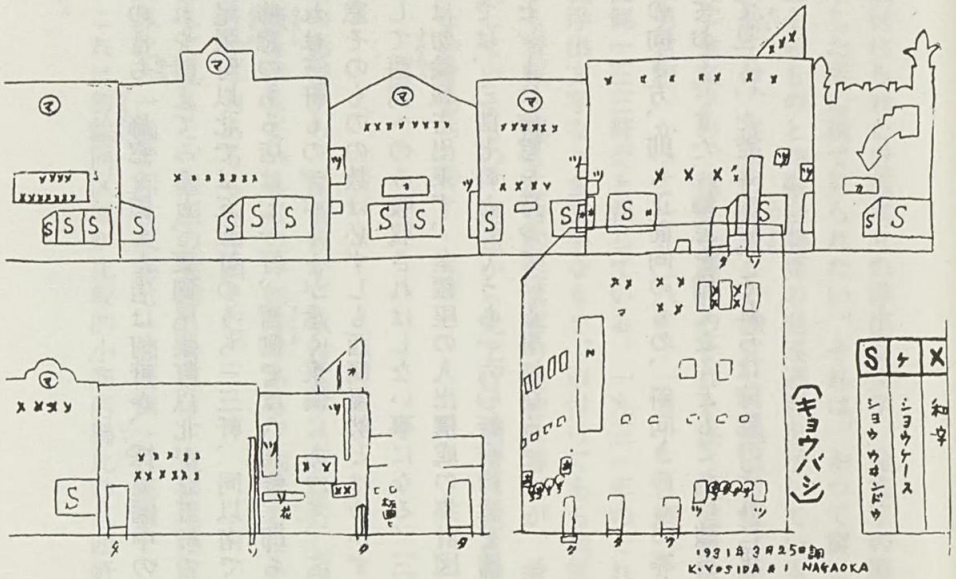

松
板間ヒ
K·YOSIDA



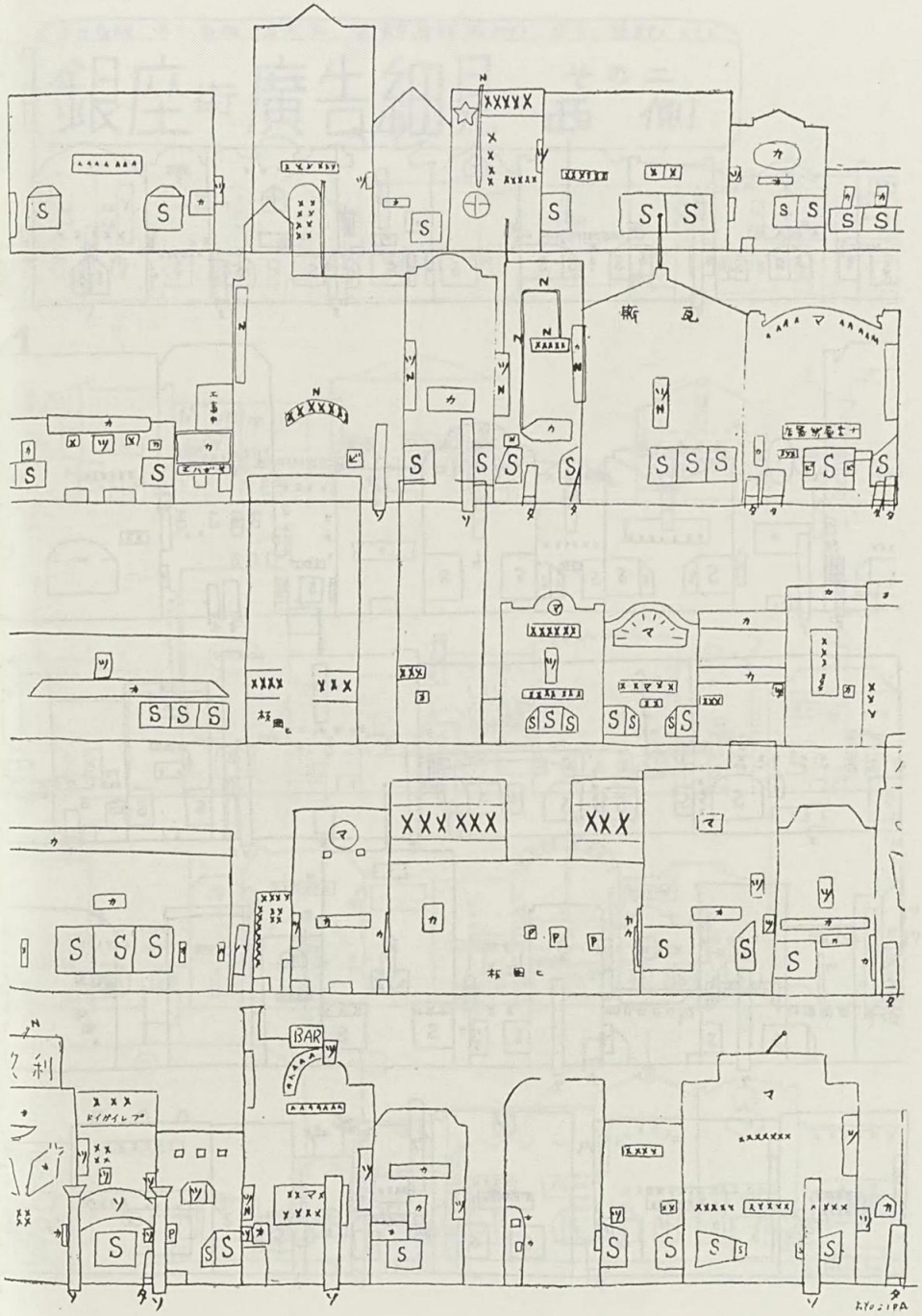
実出看板・吊り看板・金文字・装飾看板取附ケノ商店ハ猶野ォ Etc.

銀座街廣告細見 その二 西側





サ	サケ看板
ハ	旗
側	建物ノ側面
あ	あんどん
ビ	貼ビラ
P	ポスター
ツ	突出し看板
の	のれん
ち	提灯
ボ	ぼんぼり
タ	立看板
ソ	装飾塔ス看板
マ	マーク(店スハ商品ノ)
カ	看板
N	ネオンサイン
ヘ	英字



*

さて二四七軒のうち、飾窓を備えた店は何軒か、採集図中のS字で示したものがその位置と大体の格好だが、それを計えてみると、東側尾張町以北が五五軒のうち四〇軒、同以南では五二軒のうち三一軒、西側尾張町以北では五五軒のうち三三軒、同以南では八三軒のうち五六軒という事になり、即ち東側で飾窓のある店は七一軒、西側では八九軒、即ち東側に比べて西側が遥かに飾窓のある店が多い。それは三軒ものデパートが悉く東側にあって、広い間口を占め合っている故でもあろうが、従って飾窓そのものの数は必ずしも西側優勢とはゆかず、従って、散歩者群進行の率が飾窓の賑かさに正比して西側へのみ吸収されはしない事になる。三軒のデパートの連続飾窓の吸収率は、この採集図からは勿論報告出来ず、全銀座の人出構成の集計図を必要とするであろう。

とにかく、茲では、二四七軒としてうち一六〇軒が飾窓を備えている事であり、即ち全銀座の商店の約六四パーセントは飾窓を持っている事になる。

*

飾窓の舗道への向き方、即ち正面向のもの、斜向きのもの等の課題は、直接図に就て見ていただく労をお願いしておく。また、飾窓を備えなくともこれに該当する処の陳列ケースや陳列棚等の配置も同様図に就て見ていただきたい。それらは飾窓のそれに比して計するほどの数量を持たぬものでもあるから。

*

建物に直接取付けられた看板代りの浮出し文字、金文字の屋号や商品名マーク等の状態は図の×印マ印其他で示した所に就て見られたい。それは、かつて震災が齎したバラック商店建築の影響から、看板と建物そのものとの融合関係の発達過程を示しているものの如くである。即ち災害後の商店建築のそれに於ては、従来の殊更なる独立した掲出看板は漸次減少して、建物に直接に取付けられた処の浮出文字金文字の、種々な調和のそれを逐う状態とはなりつつあるものの如くである。考現学同志新井泉男君が、かつて一九二八年十一月十三日調べた浮出文字を取付けた銀座各商店は、東側一九一軒西側一三三軒だと報じている。一九三一年のそれは茲にお目にかける如く全商店悉くと言ってよい程浮出文字なり金文字なりを、取付けてある状態である。

銀座で金文字も看板も旗も広告的要素零の建物は零だが、看板の文字の消えかかっているもの、金文字のはく脱しているもの、舗道から見上げて明瞭に読み難い小文字等々も寧ろ余興としての記録でしかあり得ないであろう。

*

バラック建築の影響から、揚看板が、取付文字へと移行した結果、それかあらぬか各種突出し看板は漸次増加の徴を示しているものの如くである。加うるにネオンサインの発達がますますその意匠を凝らす事に与って力あるものの如くだ。

図によって算して見ると、銀座の突出し看板は、東側尾張町以南四一個同以北三〇個、西側尾張町以南四一個同以北六一個で即ち東側七一個西側一〇二個で、殊に西側尾張町以南の区域が最も多い状態である。これは勿論同区域が比較的小商店櫛比の八四軒というその最多数に比例しているものの如くである。

＊

突出し看板の内、ネオンサイン使用のものは、東側七一個のうち二五個、西側一〇二個のうち一四個で、即ちネオン突出し看板は東側の方が遥かに多い状態だ。区域的には、東側尾張町以北の一四個が優位を占めている。

なお前記、新井泉男君の一九二八年の調べによる一般電気看板なる項目の示す数字に於ては、東側七一個、西側八六個、合計一五七個でこの図に顕われた突出し看板東側一七三個 悉く電気看板ではないが、大体二〇個の増加を示している。ネオン発達の予想に於ては、一九三一年此図に於ける現在一七三個のうちネオン三九個即ち突出し看板の約二三パーセント、なおネオン看板はいつか三〇パーセント四〇パーセントへと進行するであろう……。

＊

突出し看板以外のネオンサインはやはり東側優勢で、突出し看板と連続的のものもあり、合せて四〇個所（軒にあらず）を算する事が出来る。

＊

旗は、屋上に翻っているものは、東側尾張町以北五本、同以南五本、西側尾張町以北、同以南四本、東側合計一四本だが、棒だけで旗の掲げられていないもの東側三本、西側五本合計八本で、即ちその全部に旗を翻すなら東側二二本という事になる。

突出しの旗は、東側合計九本。

交叉の旗一個所。

建物に添って垂らしたもの一個所。

＊

広告的要素として、飾窓の固定的なるに対して、附加的なそれとして各種の広告塔装飾看板を計えよう。

東側で一八個所、西側で二九個所、そのうち西側尾張町以南の一九個所が最も多い。

＊

立看板の中には、理髪店の飴ん棒や、花屋さんの種子袋のスタンド、三角形の棒状のもの、背中合せのもの等々もあるが、一般的な店頭立て掛け式のそれは、東側九本西側二六本合計三五本で、西側が東側に比して三倍もの数を示しているのは、西側には、楽器店、蓄音機店が多い故もある。

＊

広告的要素としてのクラシックであるところののれんは紅白のそれは勿論除いて、全銀座で六軒である。

吊り花、提灯等々のそれは、図中から拾い出していただくに過ぎない数であろう。

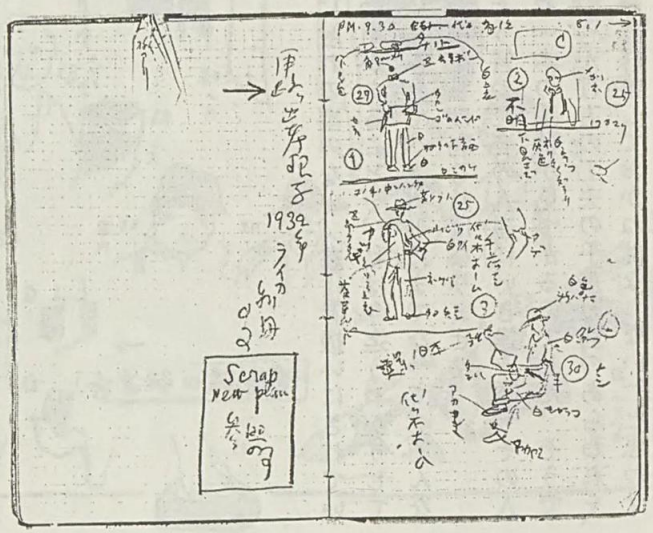
＊

建物に取付けられた店のマークは、東側二九軒、西側二八軒、合計五七軒、これは工事中の板囲

いを算せずして全銀座の商店二三〇軒のうち五七軒、即ち二五パーセントは紋所付という訳だ。

*

以上の註説で「広告細見」もオコがましいか知れぬが、一九三一年春に於ける銀座広告文化の反映の一端なりを瞥見していただけるなら幸である。

（一九三一年四月三〇日記。「広告界」一九三一年五、六月号所載。『考現学採集』所収）

第Ⅲ章　東京の考現学